

二 エスペラントとの出会い

生い立ち

山鹿泰治は、一八九二年（明治三五年）六月二六日、父善兵衛、母京（筒井家の出）の第一二子（兄妹一三人）として、京都三条烏丸に生まれた。彼が育った家はたまたま幕末勤王の浪士梅田雲濱が、「妻は病床に臥し、児は飢えに泣く。今朝の生別、死別を兼ね……」の悲歌を残して、幕吏に捕われ、曳かれていった浪宅跡であった。間口八間奥行八間、庭に柳の太木が一本生えていたのを伐採し、印刷所に改造して使っていた。そして父から口ぐせのように、先祖は山鹿甚五左衛門（素行）だと聞かされたが、そのことよりもこの家の先住者が何故幕府に反抗したのか、どうして処刑されたかの方が印象強く、子供心にいつも気になったという。

若いころ父は、京呉服悉皆の行商で長崎へゆき、長崎奉行所の通辞でオランダ学者本木昌造のもとで西洋染織の知識を得ているうちに弟子となりそこで活版術を伝授された。後にわが国活版印刷の開祖として知られる本木昌造は、直弟子三人をえらんで、「も」の字を図案化した自分の家紋を工場の

マークに、また自分の雅号点林堂（本木の、をはずし、木をならべたもの）を屋号として与え、一八七四年（明治七年）東京・築地活版―平野富治、大阪・大阪活版―谷口黙次、そして京都では山鹿善兵衛に印刷所を開かせたのであった。

しかし東京、大阪はともかく、京都は遷都以来火の消えたようなさびしさで、時代に先駆けた新商売はほとんど成り立たなかった。注文は月に名刺百枚もあればよく、その他に引札とよぶチラシがわずかにあるだけで、父善兵衛は、たちまち家産をくいつぶしたうえ破産整理するまでになった。

山鹿泰治が生まれたころ、父はすでに業を長兄条次郎にゆずり、長兄は負債をせおって悪戦苦闘、苦しい経営を必死で維持していたときであった。条次郎は四七歳で死んだが、その間、明治三〇年代には英字週刊紙『ガイドニュース』などを発行、京都ではじめて欧文印刷をはじめたり、商業学校の貿易実践用の面倒な欧文書式を作ったり、先覚的な仕事を残した。しかしその没後十年たたぬうちに、点林堂は維持できず人手にわたることとなった。

一八九九年（治三二年）、山鹿は家のすぐ向かいにある龍池小学校に入学した。その頃は家業の一番苦しいときでもあったので、彼は学校から帰るや否や、インクつけや紙取りをやらされ、朝も登校前から追いまわされるという風だった。

小学校から京都第一高等小学校三年をへて、一九〇五年（明治三八年）京都府立第一中学に入学したが、早朝と夜ふけまで家業を手伝うため、予習復習はおろか授業中も居眠りするしまつであった。おまけに教科書だけは買ってくれたものの、ペン先一つ不自由で、文句を言えば「家の用事が手伝えないう学校ならやめてしまえ」と怒鳴られて、小僧以上に使われた。

またある時は、英語の試験にインクがなく、水でうすめて書いたが、かわくと白紙同様。事情をしらぬ教師にさんざん叱責され、つくづく学校がいやになってしまった。

こうした環境を嫌って、一九〇七年二月に家出した彼は、あてもなく東上を志し、汽車の線路をひたすら歩いた。名古屋近くまできて、飢えと寒さで進退きわまり、何人かの人に助けられ引き返すこととなった。

しかし、これが契機となり間もなく兄夫婦も了解して、その三月、東京の知人中村氏をたよって上京することとなったのである。

草創期のエスペラント運動

上京した一五歳の少年山鹿は、早速有楽社の住込みの小僧となり、事務所の雑務を手伝うことになった。

この有楽社は、支配人安孫子貞次郎が熱心なエスペランチストであり、社長中村弥二郎もまたその賛同者であった。そして、日本最初のエス日辞典やガントレットの『エスペラント読本』、『月刊ヤパーナ・エスペランチスト』などを刊行すると共に、その前年に発足した日本エスペラント協会（略称 JEA）の事務所は、その有楽社内に置かれていたのであった。

ここで、初期エスペラント運動のことにふれておこう。

エスペラントは、一八八七年（明治二〇年）にポーランドの医師ザメンホフが考案提唱し、そしていま、世界に散在する約五〇万の人々が、その使用を拡大しようと運動している世界共通語のことである。

る。

日本にエスペラントがはいってきたのは一九〇〇年の初めごろだが、しかし一八九一年には、はやくもドイツ留学中の丘浅次郎（日本へ最初に進化論を紹介した動物学者）が学習してその会員になっていた。また一八九三年、外務省嘱託として来日した英人ギヤハガンは、ザメンホフの冊子の英訳者であったし、宣教師として赴日した仏人エスペランチスト、ミスレルは、のち一九〇二年、英字紙『ナガサキプレス』にエスペラント語紹介の記事を書き、長崎海星中学の生徒六〇名にはじめて教えている。また同じ年、『文学は男子一生の仕事にあらず』と満州を放浪し、ウラジオストクにいた長谷川辰之助（二葉亭四迷）は、同地のエスペラント学校長ポストニコフからエスペラントを学び、日本でぜひエスペラント教科書を出すよう依頼をうけた。それは一九〇六年『世界語エスペラント』彩雲閣発行となって実現した。

一九〇三年には、黒板勝美、神保格、吉野作造、福田国太郎（彼のエスペラント協会会員番号は百番である）が英文入門書でそれぞれ独習をはじめた。一九〇五年には堺利彦が、当時平民社に出入りしていた黒板の話を聞いて、早速『直言』三月一九日号に「エスペラントの話」を書き、社会主義者に注目されることとなった。（この頃、まだ黒板はザメンホフの正しい訓を知らず、『Zamenhof』を堺にツアメノフと教えている。）

おそらく大杉栄（エスペラント協会会員番号は二〇一番）は、この『直言』の記事などでエスペラントに関心を持ったのであろう。彼はその年の夏、東京外語学校仏語科を卒業し、翌年三月電車賃値上げ反対運動で三カ月間、東京監獄に最初の入獄を経験したが、その在監中にエスペラントをマスターし

たと思われる。そして出獄するやすぐに日本エスペラント協会の設立に加わるなど、めざましい活動をはじめたのである。

さてその一九〇六年（明治三十九年）は、わが国でエスペラントが一躍ジャーナリズムの話題になった年であった。日露戦争の結果、海外に眼を向けはじめた国民の気運に乗じて、その五月に黒板勝美の談話が『読売新聞』に載ると、エスペラント熱は急速にもりあがった。二葉亭の『世界語』が飛ぶように売れ、その一年間にたちまち九種の学習書が発行されるほどであった。

こうした背景のもとに六月一二日、黒板、安孫子らが発起して日本エスペラント協会が東京に生まれた。事務所を安孫子が支配人をしている出版社有楽社において、七月三〇日には機関紙『ヤバーナ・エスペランチスト』が出るはこびとなった。

講習会もつぎつぎに開かれた。国民英学会（ガントレット指導 受講者一九〇名）東京外国語学校（浅田栄次指導 受講者二〇〇名）などのほか、同校誌『語学』にエスペラント講義（大杉栄執筆）が連載された。また九月一六日、大杉は東京本郷の私立習性小学校にエスペラント学校を開設した。このときの第一期卒業生の一人、千布利雄は受講中からすぐれた逸材で、その翌年四月には、大杉と共に機関紙『ヤバーナ・エスペランチスト』の実質的編集者になった。また有楽社にエスペラント領事館がつくられたとき、領事安孫子貞次郎・副領事大杉・千布と名をならべて、その後も長くエスペラント運動の中心的推進者となった。

このように、エスペラント運動は、例えばこの年末『朝日新聞』が「一九〇六年の最大のトピックは、浪花節とエスペラントの大流行」と書いたように、大いに宣伝されてはなばなしの出版をした。

しかし、一時の昂揚がすぎると、その流行は、わずか半年あまりでみるみる下火となっていた。

そして山鹿（エスペラント協会会員番号は九〇四番）が上京したころを境として、エスペラント運動は、社会不況と打ち続く社会主義弾圧の余波と、桂内閣の露骨な反動文化政策などによって、沈滞の一路をたどることになったのである。

有楽社時代

さて一九〇七年（明治四〇年）三月、山鹿は有楽社に住み込んで数日後のある日、廻状がまわってきて、社内でエスペラント講習会がはじまることを知った。山鹿は、性来の好奇心も手伝って、真っ先にそれへの参加を申し込んだ。

——小柄で丸顔の黒板さん（文博黒板勝美・東大史料編纂課につとめ、古文書解説その他の業績でも著名）は左のほほに目立つ凹みがあって、すこしドモリだった。パツ、パトロ、カイ・フラート……と『練習題集』を読んだ。しかし講習が三回と進まぬうちに、はじめ三〇人あまりだったのが続々落伍して、最後に私ひとり残り、講習会もいつしか中絶した。しかし私は中学の英語で白紙答案を出しゼロ点をとったことがある。よし、石にかじりついてもエス語だけはモノにしたいと思った。そして有楽社から出たザメンホフの『練習題集』と、長谷川二葉亭（四迷）の出した『世界語』で独り学んだのであった。

このようにして山鹿とエスペラントとの運命的な出会いがはじまった。それに彼が有楽社に住み込んでいたせいもあって、協会事務所の仕事や雑用一切を、しぜんに引き受けることになった。こうし

て山鹿は、当初から運動の中心、日本エスペラント協会の事務所で働き出したのである。それは、とくに運動下降期の——一部小数の学者やインテリによる業余の運動としてほとんど行動力をもたない陣容のなかで、まだ年少未熟とはいえ——他に代えがたい存在であり、具体的な運動の維持力となるものであった。

またその頃、山鹿は洗礼をうけて熱心なキリスト信者となった。ある夜、銀座を歩いていて救世軍の伝道聞き、その果敢な闘いに身も心もふかく揺がされたのであった。

——私は救世軍銀座小隊の兵士となった。毎晩銀座四丁目の本営へ出かけ、迷える魂を救うためサタンと闘った。非合法に遊廊から脱出してくる女の解放のために、救世軍が石を投げられたりなぐられたりしながら働くとき、私の正義感は大いに満足した。しかし、ブリス大將にひきいられた救世軍は、軍隊組織そのまま命令絶対服従の専制で、私の良心をしばしば悩ました。またエスプランチストとして、イギリス一辺倒のあり方は不愉快きわまるものであった。

築地活版に入る

——そのうち有楽社は、戦後不況のあおりで一九〇九年（明治四十二年）に倒産した。黒板博士、千布利雄らが麹町内幸町に小さい二階家をみつめて、JEA事務所を移すことになった。

二階は六畳と三畳の二間、階下は便所と台所で家賃は一元だった。私は三畳の隅に寝泊まりして、協会の無給書記として執務する一方、自活のため築地活版製造所（父善兵衛の同門弟子、平野富治が創業した）に入って、その欧文植字工見習い（日給三〇銭）として働くことに決めた。

一二月の寒い朝、私はひとりで、協会の全財産——といっても机ひとつと、外圍から委託された本や辞書、印刷物など——を大八車一台に軽く積んだのを引っぱって引越した。協会の機関紙『ヤバーナ・エスプランチスト』は、それまで注文していた東京印刷に相当の借金を残したまま、私がつとめる築地活版でやることになった。

私は毎日工場へ、救世軍の赤いリボンをつけた帽子をかぶって通勤したので、たちまちみんなから「ヤーソみそ、テッカみそ」とはやしたてられることになった。その頃少年工は、毎日午前午後二時間ほど、会社の小学校の補習教育のようなものを受けていたが、私はエスペラントが読めるので特別扱いだった。それも、そねみのもとだったかもしれない。みな勉強している時間、私は職長にみつからぬよう気を配りながら二階の窓から紙トンビを飛ばして、飛行機の実験に夢中だった。さまざまな折り方を工夫した紙トンビでたちまち庭は真っ白にうずまった。

山鹿は小学校時代から、未知で新奇のもの、とくに宇宙・空間への好奇心がつよかった。中学一年の運動会で、熱気球（炭火の熱で紙気球をふくらませ、最後にアルコールに火を点じて放つ）の実験をやったが、さらにはロビンソンクルーソーにあこがれ、ヨット操縦を試みて満潮の永代橋の橋ゲタにマストがひっかかって大騒ぎしたことがあった。また田中館愛橘博士の講演を聞き、そのころようやく知られ出した飛行機に熱をあげた。博士の家から持ち出した長持で風洞実験装置を作ったり、ゴム糸動力の模型飛行機が知られていない頃、それを作って飛ばしたりした。数年後黒板博士の書生に住み込んだ時、暇をみては竹と和紙で模型飛行機を作っていたその山鹿考案の後退翼の高速機にすっかり感心した博士は、丁度その弟が月島で黒板製作所をやっていたので「一度本物をつくらせてみようか」と

言い、実行しなかったことがある。山鹿は後年そのことをふり返って、「もしそれが実現していたら、必ず墜落して死んだにちがいない」といつている。

その頃、日本最初の飛行を代々木練兵場で行なった徳川大尉が買収求めたのは、フランスのファルマン式の飛行機であった。その発明者アンリー・ファルマンがエスペランティストであると知った山鹿は、早速手紙を出した。ファルマンは写真や資料をどっさり送ると同時に、もっと日本で買ってくれるよう斡旋を頼んできたという。

そんなことで山鹿のこの紙トンビ遊びも、子供のいたずらとは異なり、それは後年の活動で、昇越しのルポに役立てたり、インド旅行の時に女学校でヒコークのプリンシプルから紙トンビの折り方で説明し皆にやらせるなど、さまざまに活用して使われることになるのである。

日本で最初・外人とのエス会話

——一九〇九年の夏、マニラ居住のポルトガル人F・V・フレイレが「いま横浜に滞在している。夏中いるから次の日曜に協会を訪ねたい」とハガキでいつてきた。サア大変。誰も外国人とエス語で話した経験がない。黒板博士や千布利雄に聞いても、初対面のあいさつをどう言うかさえ知っていない。「まあ相手が言う通りマネしたらよいだろう」と一決したが、出迎え役を私に押し付けられてしまった。

あれこれ思っているうちすぐ日曜。新橋駅で待っているとやってきたのは、写真通りの堂々たる紳士。握手したとたんに何やら早口でしゃべりまくる。こちらはあがってしまつて心臓がドキ

ンドキン。とても練習題集一冊の知識ではムリだ。ともかく協会に千布さんらが待っているから行こうと、新橋から銀座の方へ歩いていくうちに、次第にフレイレの言うことがわかつてきた。四丁目の角まで来た時は、もう何でもすらすらしゃべれる。相手の話すことがみなわかつて面白いほど。エスペラントとは何と摩訶不思議な言葉なんだろうと、その時わねながらびっくりした。

それから毎日フレイレはやってきて、私はいくども東京案内をやった。字引をポケットにしのばせていたが結局一度も使うことがなかった。ただ一度だけ困ったことがあった。「マニラの友人が、日本へ行ったら一度だけヨシワラという町をみてこい、と言った。通るだけでよいから案内してくれないか？」とフレイレが言う。

私はなにしろ救世軍のガリガリで、一七歳の少年。一言のもとに拒絶したが、なおしつこく、「道があるなら通つてよい筈ではないか」「では通り抜けるだけ」という約束で、車屋に道を聞いて吉原の大門を入った。桜の植え込みの両側の家の表に白木の板の同じものがずらりとならんで「御遊興料金参円八拾錢也」と書いてある。同じものが戸毎に下がっているものだからフレイレは不思議に思つたらしく「何と書いてあるか」と聞く。御遊興料を何と訳すか？ 遊びならJudo、だが遊び料ではわかるまい。「コスタス・トリエン・オクデクセエーノイ・ボル・ウヌ……（三円五〇錢……）」でゆきづまっていると、彼はのぞきこむようにして「ボル・ウヌ・ドルモ（ひとねむり）？」と言った。「ホーイエス」、「ひとねむり三円八〇錢」で片付いたが、単語が出なかったのはこの時ぐらいだった。（このフレイレとの交流については三十数年後の後日談があ

相坂侑との奇縁

さてエスペラントとアナキズムの二つを一体にした活動で、のちに山鹿泰治と無二の盟友となった相坂侑（エスペラント協会会員番号は四一五番）との始めての出会い、彼が有楽社で働いているときだった。

——一九〇八年か九年の秋ごろ、協会事務所へ二五、六歳ぐらいの青年がたずねてきた。色白で、ちぢれ毛を刈りこんで、度のきつい眼鏡をかけていた。協会は専従者がいなかったから、そんなときはたいてい私が仕事をやめて応接に出た。青年は広島のカリスト教会の事務員で、「エスペラントを独習していたが、こんどしばらく滞在する用件があるので、その間ときどきたずねてエスペラント語会話を実地にやってみたい」といった。顔をあらためて、いかにも内気そうな青年だった。

私はそのころ、エスペラント語に大分自信がついていたので、望むところと早速応じて、話しかけた。青年は、独習にしても大分年期がはいっているらしく、案外すらすらと返事が返ってきた。すっかりうちとけて、それから二度ばかりきたと思ったころ、どうしたのか、ふっと消えたように音沙汰がなくなった。こっちの練習にもなり、惜しいことだ、と思ううちにいつしか忘れてしまっていた。

ところが数カ月後、刑事がやって来ていろいろと聞く。それで、ああ、と彼のことを思い出し

た。彼は注意人物で、幸徳や大杉など主義者の一味なのだという。あの内気でおとなしそうな好青年が、どんな考えでお尋ね者になったのかと、どうも本当のような気がしなかった。

そう言えば、私は自分が保管しているJEAの会員名簿の始めの方に、大杉の名前があることに気付いていた。その大杉と——私は上京してまもなく、有楽社で出会ったことがあった。それは何かの反対市民大会が荒れ、日比谷の大臣官邸が襲われ、電柱を塀にぶつけてそこから乱入した市民が警官とわたりあったり、電車焼打ちなどが発生した時のことである。その日、手にピラを持って事務所にあらわれた大杉が、身ぶり手ぶりで意気込んでしゃべる姿が、よく印象に残った。

こうして後年、一緒に同居などして活動することとなった相坂や、またあらゆる面にわたって、大きな影響をうけた大杉などを、偶然にも山鹿は、まずエスペラントを通じて、垣間見たのである。しかしまだそのころの彼の視線は、キリスト教や新奇の——他の物事にのみむけられていて、アナキズムへの関心は全くなかったのである。